

マラン大学プログラム



編集者 泉・柘岡

参加者プロフィール



渡辺 裕介 (団長)
工学系研究科電気電子工学専攻
1年

以前からインドネシアに興味があり、英語はもちろん文化について学ぶことができるため、このプログラムへの参加を決意。



八尋 あやな
農学部生命機能科学科
2年



安部 和沙 (副団長)
農学部生物環境科学科
1年

大学でインドネシア人の留学生と仲良くなったことでインドネシアに興味を持ち、様々な国の人と英語を使ってコミュニケーションが取れる UMICamp に参加したいと思ったため、今回のプログラムに参加。

国境も文化も宗教も超えて友達を作りたくて参加した。



松丸 直貴
理工学部数理科学科
1年



泉 健夫
工学系研究科電気電子専攻
1年

将来のため、東南アジアの家電について知りたいと感じた。またインドネシアの友人の影響でその文化を身をもって学びたいと感じ、参加を決意。

発展途上国かつ多文化で英語が通じる国に興味があったため。



柘岡 明音
経済学部経済法学科
1年



伊藤 真輝
経済学部経営学科
2年

色んな国の文化を知ったり、東南アジアの良さをもっと知って日本人に伝えたくて、参加を決意。

発展途上国である東南アジアを自分の目で見たり、様々な国の人と英語を通じてコミュニケーションを取れるようになるため。

プログラム概要

【期間】2018年8月22日～9月4日（14日間）

【留学先】マラン大学校

Kec.Lowokwaru, Kota Malang

【内容】

今回の SUSAP マラン大学(インドネシア)プログラムの内容は、大きく二つに分けられる。まず、マラン大学が主催する「UM iCamp 2018 (UM International camp 2018)」への参加、そしてインドネシアのマラン大学、マレーシアのペトロナス工科大学、日本の佐賀大学の三校で行うエンジニアリングセッション (ASEF: Asian Students Engineering Session)への参加の二つである。また、本プログラムの実際のスケジュールは表1に示す。

1. UM iCamp 2018

8/24 から 9/1 までの期間で行われた UM iCamp 2018 について記述する。この UMiCamp は、48 か国 65 人も参加者が集まり 9 日間でインドネシアの文化を学びつつ、共に生活していくキャンプである。2016 年から開催されており、今年で 3 回目となる。マラン大学の先生方の一声から始まったイベントであり、生徒が主体となって内容を企画し、当日の進行やホームステイ、撮影等の裏方の準備等も行っている。

キャンプ内容としては、大学案内、ガラディナー、伝統スポーツ体験、バティック体験、インドネシアの言語学習会、キャンプファイヤー、ランタン作製、湖でのモーターボート試乗、村でのホームステイ、伝承遊び、バトゥ美術館見学、プロモ山の登山、伝統舞踊、マランの街散策等を行った。

具体的な説明として、ガラディナーはオープニングセレモニーであり、参加者が各自国の伝統衣装を着用し、ステージ上で披露するものである。バティックは、インドネシアの伝統的な染物である。人の手で染めるものと、機械で行う二種類ある。プロモ山の登山は、午前 0:00 から出発し、朝方登頂し、日の出を見るイベントであった。

当然ではあるが、会話は全て英語で行い、ホームステイ先ではインドネシア語を用いることもあった。インドネシア文化だけでなく参加国の文化を互いを知ることでできるキャンプであった。

2. ASEF (Asian Students Engineering Session)

インドネシアのマラン大学、マレーシアのペトロナス工科大学、日本の佐賀大学の三校で行う理工エンジニアリングセッションであり、互いの国の文化、学生生活、大学について等について約 30 分のプレゼンテーションを行った。その後、いくつかのグループに分かれ、佐賀大学とペトロナス工科大学の生徒にマラン大学の生徒が様々な質問をし、答えていくセッションを行った。

3. その他

UM iCamp 2018 が 9/1 の午前に終了し、9/3 の ASEF までの間、過去に佐賀大学への留学を修了し、今回のプログラムのサポーターであるマラン大学の生徒とマラン大学の教授の方にマランの街やブリタールの街案内をしていただいた。マランの街ではショッピングモールやコンビニエンスストアに寄り、日本の店との違いをサポーターから実際に見ながら説明していただいた。また、ブリタールではスカルノの墓、博物館に行き、インドネシア独立の内容を学んだ。

表 1. 本プログラムのスケジュール

日程	内容
8/22	飛行機の欠便により福岡のホテルで宿泊
8/23	スラバヤに到着後、マランのホテルで宿泊
8/24	iCamp 開始、大学案内、ガラディナー
8/25	伝統スポーツ、バティック体験
8/26	言語学習会、伝統舞踊、ランタン作製
8/27	湖でのモーターボート試乗、ホームステイ
8/28	ホームステイ、伝承遊び
8/29	バトゥ美術館見学
8/30	プロモ山の登山
8/31	マラン街散策、クロージングセレモニー
9/1	iCamp 終了
9/2	ブリタールの街見学
9/3	ASEF
9/4	帰国

「プログラムを通して」

工学系研究科電気電子工学専攻 1年 渡辺裕介

私はマラン大学プログラムに参加して、インドネシアの文化について学ぶことができました。

まず、私がインドネシアに興味を持ったきっかけは、同じ研究室の留学生です。彼と1年間交流する中で、インドネシア料理や宗教、そして伝統舞踊など多くのことを教えてもらいました。インドネシアには日本とは違った文化や多くの言語が存在しており、独自の発展をしている国であると思いました。私は他国について興味を持ち、より一層インドネシアに対する関心が強くなりました。そしてインドネシアに自ら訪れて、それら文化を経験したいと思い、参加を決意しました。

このマラン大学プログラムは、他国の参加者とインドネシア語、さらにはインドネシア文化を学ぶことを目的としています。この期間中、日常会話は英語でおこない、様々なアクティビティを通してコミュニケーションをとりながら、インドネシア語、またインドネシア文化を学ぶことができました。マラン大学の先生によるインドネシア語講座、パティック体験、インドネシアの伝統舞踊体験などおこないました。他にも多くのアクティビティがあり、インドネシアについて理解を深めました。

このプログラム中、私はホームステイ先のご家族と結婚について話をする機会がありました。ステイ先のお父さんは、インドネシアでは家事が大変であるため、若くして結婚する人が多いとのことでした。そのこともあり、インドネシアでは若くして結婚することが良いという風潮があるそうです。ホームステイ先のご家族も20歳前に結婚していました。また、冗談ですが、インドネシア学生の中には、自分の年齢を実際よりも若く言う人もいて、このような風潮がまだ残っているのではないかと

と思いました。

それに対して日本では、その風潮はなく、むしろ女性の社会進出などにより晩婚化が進んでいます。もちろん、社会進出だけで晩婚化の原因とは言えませんが、要因の一つとして考えられると思いました。そのため、インドネシアも何年後、もしくは何十年後には、家電など普及するにつれて、家事がしやすくなれば若くして結婚するのが良いという考え方はなくなるのではないかと思います。今回行くことがなければ、このような違いについて考えることがなかったので、私にとってとても興味深い経験になりました。

次に、私は実際に海外に行くことによって当たり前だと思っていたことの大切さを感じました。私たちは今回インドネシアのマラン大学、マレーシアの大学、そして佐賀大学の3校が各国について紹介し、討論する機会がありました。その中で、他国の方は桜や雪といった四季に関するものに強く関心があることが分かりました。私自身、四季に対して一年に一回きて当たり前の存在でしたが、今回のプログラムを通して日本の素晴らしさに気づくことができました。

また、このイベントで書道の体験をしました。インドネシア学生はとても喜んでくれました。夢という文字を実際に書いてもらって、日本文化を体験してもらいました。

インドネシア学生に日本文化について説明する中で、新たな発見もあり、日本文化の素晴らしさを伝えるためにより敏感に文化について学んでいかなければならないと思いました。また、それらを明確に海外の人に伝えるためにはさらなる英語の勉強をしなければならぬと感じました。

最後に今回の留学を通してこれまでにほとんど考えることがなかった日本と他国のちがいについて実際に自分で体験して理解したいという思いが強くなりました。さらに比べるためには、日本について学び、英語で意見し伝えることができるよ



「違いから学んだこと」

農学部生物環境科学科 1年 安部和沙

私はマラン大学プログラムに参加して、様々な国の学生と自分自身を比較することができ、自分の成長のためになる貴重な経験をえました。

今回のプログラムの主となる目的は、インドネシアの文化と伝統を知ることでした。私が実際に現地に行ってみて一番印象に残っているのは、数多くの島からなるインドネシアが一つの国としてまとまり、様々な文化が共存していることです。プログラムの中では、多様な種類の伝統的な踊りを見たり、実際に体験したりしました。また、マラン大学の学生と交流した時には、それぞれの出身地や言語、イスラム教の信仰の違いがあることも知りました。日本では、文化や言語の違い、宗教のことについて考えることはほとんどありませんが、今回の経験でインドネシアは多様な文化に寛容な国であることを実感しました。プログラム中に英語でのコミュニケーションがうまくできなかった時や、急な予定変更で混乱していた時などに、何度もインドネシアの学生の方々の優しさに救われましたが、このような人柄はインドネシアの寛容な国民性によるものもあるのではないかと思います。さらに、この寛容性が感じられた点として、インドネシアの生活の中での時間に対する考え方が日本とは異なるという点も挙げられます。日本では、スケジュールを決めたらその通りに活動しなければならないですが、インドネシアの場合はそうではなく、少し計画と時間がずれることや計画が変更になることがよくありました。

今回、私がプログラム中で一番大切にしたのは、自分から積極的にコミュニケーションをとりに行くことです。私はプログ

ラムに参加する前に、自分の英語力はまだまだ不十分ではあるけれど、この機会を生かしてもっと自分の視野を広げたいと思いました。実際に、現地でのプログラムが開始されると、周りの参加者の方々やマラン大学の学生の方は流暢に英語を話していて、正直少し気後れするところもありましたが、プログラム開始前に立てた目標を思い出し、恥を恐れずに自分から進んで様々な人に話しかけるようにしました。周りの参加者の方の話についていくのは大変でしたが、最初に英語があまり上手に話せないことを伝えると、話すスピードを落としてくれたり、簡単な単語に言い換えてくれたりする人が多く、徐々に多くの人に話しかけていけるようになりました。

このようにして様々な国の学生とコミュニケーションをとり、私は多くのことに気づきました。まず、日本人以外の人の英語力、コミュニケーション能力がとても高いという点です。私はこのプログラムを経て、一対一の会話であれば自分から話を広げていくことができるようになりましたが、何人かのグループになった時に、周りの人が話していることを聞き取るので精一杯になってしまい自分から意見を言うことができなかったり、自分の意見がしっかりしていなかったためにはっきりとしない返答をしてしまったりしました。また、新しくできた友達とお別れをするときも、感謝の気持ちを伝えたい一方、それを英語でどう表現していいのかわからず、自分の気持ちをうまく表現できないもどかしさを感じました。次に気づいた点は、他国からの参加者の方々の積極性がとても高いということです。特に、グループ活動になった時に自分からリーダーシップをとろうとする人が多く見受けられたことには驚きました。さらに、自分の意見が少数派でも自分の意見をしっかりと伝えるこ

とができるところはとても尊敬できると思いました。

私は将来海外で仕事をしたいと考えているので、今回の経験で、様々な国の学生と自分を比較して自分にはどのような能力が不足しているのかを見つけ、今後の課題を発見する良い機会となりました。まず、今回英語を使って円滑なコミュニケーションをとることができなかったことの改善点として、英語を使う機会を見つけ、英語力を上げていきたいと思います。次に、様々な文化や考え方を持つ人たちがいる中で自分の意見を発信できなかった点の改善点として、身近なことにも自分なりの考えを持っておくようにしたいと思います。さらに、今回出会った参加者の方々のように積極的に様々なことに挑戦していきたいと思います。これからも、インドネシアについて学んだこと、新たにできた友達との関係を大切にしつつ、今後の課題

「知見」

工学系研究科電気電子専攻 1年 泉 健夫

「知見」とは、その字の通り、自らの目で「見」て「知」ること。考察を行って得た知識。といった意味である。私がSUSAP2018 インドネシア・マラン大学プログラムに参加した目的は、三つある。

一つ目は、インドネシアの文化を知ること。これは、昨年同じ研究室であったインドネシアからの留学生の友人の影響である。

二つ目は、iCamp やエンジニアリングセッションで得た知識を自分の今後の研究に活かすため。

三つめは、東南アジアの家電について知りたいからである。私の夢が、家電に携わることであり、近年日本の家電は東南アジアでの拡大にも力をいれているからである。

これらを一つにまとめ、今回のプログラムで「知見を広げる」という大きな目標を掲げた。

まず、UM iCamp 2018 では48か国65人もの参加者が集まり、キャンプの9日間で非常に多くのイベントを経験した。そのどれもがインドネシアの文化を学ぶことのできるものであり、また容易に現地の自然に触れることができたが、特にインドネシアの文化を学べたのは、「村でのホームステイ」、「バトゥ美術館見学」、「マランの街散策」の三つであった。

村でのホームステイでは、インドネシアのマランに住まわれている方の家で二日間ホームステイをした。トイレは予め貯めてある水を桶で流す、トイレトーパーがないといった日本での生活との違いを感じたほか、早朝にホームステイ先の村を

に取り組んでいきたいと思います。



キャンプサイトにてインドネシア伝統のバティックを体験

散歩していると、パパイヤやキャッサバなどの日本では余り見ることのできないものを見つけることができた。また、ホームステイ先のご家族の方は非常に優しく、日本に対して興味があり好意的であった。インドネシアの村の方は、親切でハートフルな方だと感じた。

バトゥ美術館見学では、インドネシアの歴史的美術品が多くあるほか、バティック体験、伝統舞踊講座があり、一つの施設で多くの文化を楽しみながら知ることができた。また、UM iCampの運営のマラン大学の学生が美術館内の物についてその場で説明してくれたこともあり、より深く知ることができた。

マランの街散策では、主に日本との交通の違いを知ることができた。最も目についたのは、バイクの多さである。自転車に乗る人は殆どいなく、道路の隙間という隙間にバイクが並んでいた。自動車は日本同様に使用されていたが、道路では、歩道や横断歩道がほとんどなく。道を横切る歩行者はいつ轢かれてもおかしくないようなものだった。

iCamp ではインドネシアの文化を知るほか、他の国の人と英語を用いて仲良くなり、また知りたかった家電のことも聞くことができた。スマートフォンもそうであったが中国の製品が多いようだ。

次にASEF(Asian Students Engineering Session)では、インドネシアのマラン大学、マレーシアのペトロナス工科大学、日本の佐賀大学の三校で行う理工エンジニアリングセッションを行うイベントであった。そこで私は、マラン大学の学生から研究のほかに日本文化について多く質問をされた。また、私もペトロナス工科大学やマラン大学の生徒に各大学の理工学について聞き、日本との比較をすることができた。

私は、このプログラムを通して「知見を広げる」という目標を達成できた。それは、iCamp と ASEF の二つのイベントを通してインドネシアの文化や家電、理工学について知ることができたのはもちろんのこと、日本文化を伝えることができたからだ。文化を伝えるためには、改めて文化について考えるため、新たな発見もあるからだ。また、知見を得ただけでなく多くの新たな友人を得ることができたことから有意義な時間を過ごせたと感じた。



ASEFにてエンジニアリングセッションを行う

「don't be afraid」

経済学部経営学科 2年 伊藤真輝

私はこのプログラムに参加するにあたって、失敗を恐れずにチャレンジをし続けようと考えていました。参加者の中で一番、TOEICの点数が低く英語のスキルも劣る分、自分にできることは何かと常に考えてこのプログラムに参加しました。その結果、自分はこのプログラムを一番充実できたと感じています。では、どのようにこのプログラムに参加したかを紹介します。

1つ目は、一緒に参加した日本人とはなるべく距離を置き、常に海外からの参加者と行動することです。始めは、劣等感や恥ずかしさのせいでなかなか会話を楽しむことができず、悔しい思いをしました。日本人と居ると言葉が通じて安心で、そっちの方が自分にとっては楽だったかもしれません。それでも、後で後悔するのだけは絶対嫌だと思い、海外の参加者と共に時間を過ごしました。おかげで、たくさんの友人ができ、誰と話しても楽しい環境を作ることができました。

2つ目は、自分の殻を破るということです。日本人は他の国の人たちに比べると恥ずかしがり屋が多いように思われます。セレモニーなどでダンスをする時にも、ダンスには参加せずに

座って見ている人が圧倒的に多かったのですが、せっかくみんなで楽しめるイベントは積極的に参加した方がさらに楽しめます。自分もダンスが得意なわけではないですが、下手でも全力で楽しみました。誰も下手だからといって馬鹿にする人なんていないし、逆にみんなが楽しんでくれるから恥ずかしさは最後には無くなるほどダンスが好きになりました。

3つ目は、自分の得意なところをみんなに知ってもらうことです。自分がこのプログラムを本当に楽しめるようになったきっかけは、自分の得意な体を動かすゲームでした。英語が話せない分、自分のことを知ってもらうチャンスはこのゲームにあると思いました。ゲームは3種類あり、その中で自分は2つ決勝戦に残り、1つ目のゲームで優勝すると、2ゲーム目ではみんなが自分の名前をコールしてくれて、あの喜びは一生忘れないと思います。おかげで、2種目優勝でき、自由時間のゲームやどこにいても名前を呼んでももらえるようになりました。とても過ごしやすい環境を作ってくれた温かい友人たちには本当に感謝しています。

インドネシアという国は非常に温かい人が多かったです。英

語をあまり聞き取れない私たちには、理解しやすいようにゆっくり話してくれました。そのおかげで、自分たちも会話を楽しむことができました。ホームステイ先では日本人ということだけですごく接待していただき、どこへ行っても声をかけられ、写真を撮って欲しいと頼まれました。1945年まで日本に連れていかれ、戦争に参加させられたという年配の方とお話をする機会があった時、自分は申し訳ないきもちでいっぱいでした。しかし、その方は握手をして久しぶりに日本人に会えたことが嬉しかったらしく、涙を流していました。長い間、握手をしたまま会話を楽しみ、自分も泣き出してしまいそうになりました。今までの日本人の行いが今の若い世代への恩恵になっていると感じると感謝の気持ちがいっぱいになりました。

また、インドネシアへ行って強く印象に残っていることは、トイレにトイレットペーパーがないということです。代わりに水の張ってある桶とホースがあるだけでした。これは普段トイレットペーパーを使用する自分には衝撃的でした。トイレットペーパーを購入するまでトイレに行けない日を何日か送ったことはこの研修で一番過酷な思い出でした。洗濯に関しても、洗濯機というものは置いてなく桶とブラシだけが置いてあり手洗いをしなければいけませんでした。もし、洗濯機があれば生活がもっと便利になるのではないかとも思いました。乗り物に関しては、モーターバイクを利用する人がかなり多く、モーターバイクの集団に驚かされました。小学生くらいの小さい子でもすでにバイクに乗っていることも見受けられ、生活に欠かせないものになっているんだなと感じました。ただ、信号機は

あまりなく道も整備されてなかったりと危険な面も多くありました。他には、物価の安さには度肝を抜かれ、インドネシアで暮らしたいと思うほどでした。一食あたり100円で済ませることができ、大好きなコココーラも日本円で40円くらいで売っており、日本で買うのを最近ではためらってしまいます。

最後に、このプログラムでずっと自分のことを理解してくれ、一緒に同じ時間を一番長く過ごしてくれたウィリーに感謝の気持ちを伝えたい

です。国境を越え、それでもお互いのことを理解し合い、辛い時や苦しい時、楽しい時もずっと一緒に居てくれたウィリーと、今でも電話をして馬鹿なことも言い合える親友ができたことはこのプログラムの一番の成果だと思っています。観光じゃないんだよと言われたこともありましたが、自分は観光のつもりでこのプログラムに参加したつもりはこれっぽっちもありません。だから、そのように言われた時、すごく悔しくて憤りさえ感じました。自分はどのプログラムも全力で参加したし、後悔していることはないです。あるとしたら、みんなともっと一緒に居たかったというくらいです。それでも、またみんなと会う約束をしたので、もっと英語を勉強して再開を楽しみに頑張りたいです。



美しい朝日

「Terima Kasih Indonesia」

農学部生命機能科学科 2年 八尋あやな

私はマラン大学プログラムに参加して、初めてインドネシアを訪れた。出発前にインドネシアについて調べると、「宗教に関しては特に注意を払うように」、「交通量が多く交通整理されていない」、「屋台は危険」など、注意しなければならないことが多くて、正直心配だった。実際に訪れてみると、インドネシアには、日本が好きの人が多く、ムストファさんや、前半のUMi Campで出会ったインドネシアの方々がサポートしてくれて、安全な短期留学になった。

インドネシアの生活には驚きがいっぱいだった。一番驚いたのは、お風呂とトイレである。インドネシア人のみでなくマレーシア人も、冷たい水でお風呂に入っていたのだ。「お湯は出ないの？」と聞くと驚かれ、「冷たい水じゃないとお風呂に入った気がしない」と言われた。さらに、トイレはボタンを押して流れるところが少なく、バケツに溜まった水で流す。また、私が行った中でお風呂とトイレが別なのは空港付近のホテルだけだった。キャンプサイトでは、トイレにシャワーがなく、やっとお風呂とトイレが別かと思いきや、お風呂の場所を尋ねてみるとトイレだった。水のいらぬシャンプーを買ってくるべき

だったと後悔した。ホームステイ先では、わざわざ私とウズベキスタン出身の方のためにお湯を鍋で沸かしてくれて、ホストマザーの対応力の高さに感動するとともに、自分の対応力のなさがっかりした。

2番目に驚いたのは、道路である。横断歩道で人が待っていても、車やバイクは停まってくれない。警備員らしき人や現地の方に停めてもらって、やっと渡ることができる。また、道路にはバイクが溢れていて、そのほとんどが2人以上乗っていた。バイクタクシーというものもあった。バイクはほとんどが日本のもので、インドネシアの方が知っている日本語を並べるときには、「ありがとう！おはよう！こんにちわ！スズキ！ホンダ！ヤマハ！味の素！」と言っているほどだった。

味覚にも違いがあった。インドネシアの食べ物は、ほとんどが辛いか甘いかのどちらかであった。お茶も甘い。コーヒーも甘い。おやつやジュースは激甘だった。そしてごはんには毎食、サンバルソースという辛いソースがあった。UMi Campの企画者たちが気を配ってくれていて、サンバルソースは自分の好みでつけることができた。あまり好きではない食べ物にはサンバルソースを少しだけつけて辛さでごまかせたので便利だった。私は、日本から駄菓子の“タラタラしてんじゃねーよ”を持ってきていたが、インドネシアの方々の口には合わないようだった。

インドネシアでは、日本語の記載もちょくちょくみられた。

“チーズティー”や“明創優品”や“w a k a i ライフスタイル”など、日本では見られない日本語のお店もあった。Name we e (ネームウィー／黄明志)さんの「東京盆踊り 2020」という日本のカタカナ英語を教えてくれる曲を教えてくれるインドネシアの人もいた。日本がこんなにも身近にあることに驚いた。

習慣に関しては、とても気を使った。しかし、右手で荷物を持っているとき、咄嗟に不浄と言われていた左手でものを受け取ってしまうことが3回ほどあった。嫌な顔をされることはなかったが、インドネシアの方が左手で物の授受をしているところは1度も見るのがなく、もっと慎重になるべきだったと思う。

インドネシアでの生活は、行く前は怖かったけど、行ってみると楽しいことだらけだった。UMiCampではたくさんの友達ができ、ホームステイでは本当の家族のように温かいホストファミリーに出会えた。このプログラムに参加して、英語への学習意欲が増したのはもちろん、積極的に、自主的に行動できる力がついたと思う。私は、このプログラムで得た異なる文化を持つ方々とのつながりや今持っている学習意欲を大切に、この経験をこの2週間で終わらせないようにしたい。



日本のアニメのクイズに沸くインドネシアの学生

私は、マラン大学プログラムに参加して、大きく分けて3つのことを学んだ。それは宗教的なこと、発展途上が起因すること、自身の英語力のことについてである。今から各々について詳しく述べる。

まず宗教的なことである。インドネシアに行く前からコーランの内容（飲酒禁止、ハラール、礼拝、一夫多妻など）について多少の知識はあったが、実感するのは初めてであったため、非常に新鮮な経験であった。コンビニにアルコール類は見当たらず、スーパーにアルコールはもちろんのこと豚肉が一切存在しない。以前、日本に留学していたインドネシア人から聞いた話だが、日本でハラールの食べ物を探すのに苦労したらしい。一目見ても、豚肉を使っているかどうか分からないからである。指定時間になるとカアバ神殿の方角にむけて礼拝し始めるのである。相手も大学生なのでさすがに一夫多妻制を実感することは無かったが、インドネシアの英雄“スカルノ”を考えると分かりやすい。彼は世界的にインドネシア独立の中心人物として有名だが、日本ではそれと同じくらい“デヴィ・スカルノ”の影響が大きいだろう。そのデヴィ夫人はスカルノの第三夫人である。

次に発展途上に起因することである。お湯と食事のことについて述べる。生まれてからずっと日本に住んでいたため、インドネシアではお湯がどこでも出るわけではないことに驚いた。お湯が貴重な資源であるということは日本にいる限り、気づけないことだと思う。それが直接的な原因かどうかはわからないが、インドネシア人はお湯が大切な資源であるために、体を温めるため、辛い物が好きなのであると考えた。少し、食事の話に沿ったが、また食事について、別のことを話す。インドネシアではお菓子が異常に甘く、普通のお茶にでさえ砂糖を大量にいれるのである。私は元から甘いものが大好きなため問題なかったが、甘すぎるものが苦手な人にとってはつらかっただろう。なぜこのようなことが起こるか考えてみると、有名な話ではあるが、インドネシアはサトウキビの生産量が世界10位である。そのことを強く実感した。

最後に、初歩的な話にはなるが、英語力についてのことである。プログラムには様々な国から参加者が集っていたので、英語が飛び交うわけである。私も少しは英語を話せるため日常生活には問題なかったが、ある時、ジェンダーの話になり、タジキスタン出身の世界各国を旅してジェンダーのことについて調べている人が非常に興味深い話をしてくれたが、その話を聞いた後に自分の意見をうまく話せなかった。また、ホームステイ先で一緒になった経済工学博士の人と話す機会はあったが、

「インドネシアで学んだこと」

理工学部数理科学科 1年 松丸直貴

英語力の欠落だけでなく、私が学部1年だったこともあり、せっかくの機会を台無しにしたと思う。大学でも数学然り、英語も努力しようと強く思った。今度はまた、アジアの発展途上国に限らず、少しは上達した英語力を用いて他大陸の発展途上国に赴き、土地的にも少し違うことを感じ、一宗教に対しての個別的価値観を感じてみたい。そして、大学院生になった時に数学でコミュニケーションをとり、議論を進めていくという目標を達成するために、これから佐賀大学の留学プログラムを度々利用させていただき、少しずつ経験を増やしてレベルアップを図りたい。



スカルノ大使館にて、心臓が動くスカルノの写真と一枚

私がこのマラン大学プログラムに参加した大きな理由の1つは、東南アジアの良さをたくさん発見し、日本人に広めることでした。そのため、インドネシアの良さや、行かないとわからないインドネシアでの生活のことをこの報告書で伝えたいと思います。

1つ目はトイレについてです。インドネシアに着いてからの最初の洗礼はトイレでした。トイレが水洗ではないのです。そして、トイレトーパーが備え付けられていません。なぜなら、インドネシアの方は備え付けのシャワーで綺麗にするからです。私が今回の旅で最も必要なものは何だったかと問われたら、迷わずティッシュペーパーと答えるほどなくてはならないものでした。インドネシアには大きいサイズのティッシュしか売っていないので、今度行く機会がある方はポケットティッシュを大量に持っていくことをお勧めします。また、キャンプ中に謎の水不足が起こり、トイレの水が流せないという事態が発生しました。日本にいと水は当たり前にあるので貴重な資源だと感じる機会はあまりありません。当たり前ですが、水がないと喉を潤すこともできなければ、お風呂に入ることもできず、トイレだって流すことはできません。水は常にあるものと思うのではなく、貴重な資源ということをお頭に置いて、大切に使うと思いました。また、水不足について後から調べてみると、インドネシアの気候には乾季と雨季の二種類があり、乾季にはよく水不足になるそうです。インドネシアに来る前は、東南アジアには雨季と乾季があるということはただの知識だったけど、その知識を実際に経験することができてよかったです。

2つ目からはインドネシアの良さについて述べます。まずは料理についてです。インドネシアの料理は全体的にスパイシーなものが多く、スパイシーな食べ物が好きな私の口にはすごく合いました。インドネシアの方は色々な料理にサンバルソースという辛い調味料をかけます。このソースは辛くて少し酸っぱいです。しかし、ほとんどのiキャンプ参加者は辛すぎて食べられないと言って、好んで食べる私は色んな人に驚かれました。ただ、このソースには辛さの種類がいろいろあります。個人的に手作りで唐辛子が粗めに切っているのは比較的辛い印象があったので、口にするときには量などを調整してください。ただ、私達日本人がサンバルソースをかけようとするほとんど確率で現地の方に止められます。また、私が最も美味しかったと思った料理はrendangという牛肉ご飯でした。ホームステイ中に屋台で買ったのですが、美味しすぎて次の日の夕食の

「刺激的な毎日」

時も買いに行きました。バイクで夜の街を走った爽快感はなかなかのものでした。現地の人に聞くと多分場所はわかると思います。定番ですが、ミーゴレンという焼きそばやナシゴレンという炒飯もちろん美味しかったのでぜひ食べてみてください。

3つ目は、インドネシアの方々についてです。インドネシアには、訪れた人を手厚く迎えるという風習があります。具体的に言うと、とにかく訪れた先々の家でテーブルいっぱいのお菓子や食べ物が出されます。日本人はどちらかというとよそ者はとりあえず警戒する傾向があるので、このような歓迎が新鮮で嬉しかったです。またインドネシアには親日の方が多かった印象があるので、訪れた時はとても歓迎されました。

皆さんに伝えたいインドネシアのいいところはまだまだたくさんありますが、この辺で終わらせていただきます。このエッセイを見て少しでもインドネシアに興味を持ったり、行きたいと思った人が居てくれると嬉しいです。私は今回のプログラムで本当に本当にインドネシアが大好きになりました。ぜひ一度インドネシアに行ってください。



rendang